

# 文春図書館

## 私の読書日記

### 血縁をマコえて

×月×日

金閣寺の放火事件を通して、その事件を作品の題材として扱った二人の作家——三島由紀夫と水上勉を比較する本を、以前書いた。もともと三島由紀夫ファンだったので書き始めたのであるが、しかし色々調べていくうちに、水上勉の方に次第に眉入れしていく自分に気づいた。

三島と水上は、対照的な作家である。東京の名家に生れエリートとして育ち、若くして作家としても成功した三島。対して水上は、若狭の貧しい家に生れ、十歳で京都の寺の徒弟となつたのを皮切りに、様々な職業を遍歴した後、作家となった。「表」と「裏」とも言える存在である。

が、水上はいわゆる「人

たらし」であつたらしい。女性にはもちろん、男性にももてた。美男であつたのみならず、人の心を掴む術を持つていたので。水上が死して後とはいふものの、調べるうちに私が水上に肩入れしていったのも、そのせいなのかも……。

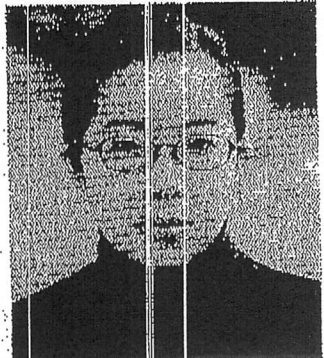
華やかな女性遍歴が知られる水上だが、最初にもうけた男児は、物心つかないうちに他家に預けている。その後、水上は子の母とは別れ、子供とも音信不通に。預けられた子供が大人になつた後、自力で調べて自分の父親が水上勉であることを知つたのが、今から三十余年前。『父 水上勉』(窪島誠一郎 白水社 2800円+税)は、その預けら

れた子供・窪島氏による、

父の姿を描いた書である。窪島氏は、三十年以上も本当の父親を知らずにいたわけだが、その父が有名作家であることを知つても、恨む様子は無い。むしろ再会を喜び、以降晩年まで、父と息子の友好的な関係は続くのだ。自分が捨てた子供の心をも、水上は掴む。著者は水上の生涯をなぞっていくが、しかし父の行跡を礼讃するばかりでは無い。「もてる人」というのは、もてる分だけ、人を傷つけている人であることも、明らかにしているのだ。

あちこちに謎を解き、成城の家にはほとんどいなくなつたという、水上。「自分の子を一度も抱いたことのない人でも、本のな

## 酒井順子



エッセイスト

かで子どもを愛してゐるって書けば、人はそううけとるかもしれないけど、それはまちがいよ」

という、障害を持つ子を一人で育てた水上の妻の言葉は重い。

水上は、貧しきや苦勞を「売り」にできる人であつた。周囲の人々も、それはわかつていた。が、わかつていながらも、その演劇性に、いつのまにかひかれていったのであろう。

原産銀座を故郷とする水上は、早くから原産への危

機感を表明していた。今の

時代に水上が生きていたら、何を言い、何をしていたのか、と思う。貧しき、苦勞、陰、弱み。それらを全て自らの糧として、また戦術として利用した水上のしたたかさは、今のような時代にこそ異彩を放つ。

×月×日

『父 水上勉』には、水上の晩年の姿も描かれる。脳梗塞をわずらつた後、長野の別邸で数年を過ごした水上の周囲には、いつも女性達がいて、代わる代わる世話をしていたのだ。そこには、妻の娘さんばかりでもない、妻の姿はなく、様々な女友達が、水上を囲んでいた。娘さんを除けば血縁の無い女性達が、おしめ交換から



父 水上勉

1966年東京生まれ。高校時代からエッセイストとして活躍。「着ればわかる」(文藝春秋)「金閣寺の燃やし方」(講談社)など著書多数。新刊に「この年齢だった!」(集英社)「下に見る人」(角川書店)。

# 文春図書館

料理まで、看取る時までの介護を担っていたのだ。

それは、水上がもてる人であったからこそ可能であったわけだが、『大介護時代を生きた』(樋口恵子 中央法規 1600円+税)を読むと、血縁の無い人達の介護として看取りというのは、先進的なケースであるということがわかる。

言わずと知れた少子高齢化時代。それは、介護を受ける人が激増し、対して介護の担い手が減少し続けるということである。人が結婚しなくなり、子供を産まなくなった時代、介護がどれほど重くのしかかる問題であるか、その自覚を促し、解決策を探るのが、八十歳を超えられた樋口恵子さん。本書の大きな特徴は、介護を受ける側の年代から、問題点と可能性を見たところである。樋口さんは、介護先進国であるスウェーデンやフィンランドを訪れ、日本の未来の介護像を模索する。北欧においては、介護サポート政策の担い手の中に、親族だけでなく、親友、近隣者、個人の見解で

親族と見なす人、といった人々も含まれているのだ。

日本では今、大家族で住む高齢者は、少数派。過半数が、一人暮らしもしくは、夫婦のみでの生活である。非婚化が進んだ中で、「親と未婚の子のみ」で暮らす高齢者の割合も、「三世帯世帯」を逆転している。

日本では従来、「介護は家族内で」という暗黙の了解があった。親子は同居し、親が年をとったら嫁が介護をするものだったのである。一九七八年の厚生白書において、日本の親子同居率はほぼ抜けた高さは「福祉における含み資産」であるとされたのは、有名な話。介護を巡る環境が激変している現状を、この本は明らかにする。子供の数が減り、家庭内で介護の担い手の数は激減。「嫁」は、実親の親の介護を期待され



「アロマザリングの島の子たち」

ている。老老介護や、親子一対一での介護において、虐待や殺人も起きています。今、「親族だけで背負わない介護」は、切実に求められているのではないかと。

親族だけで背負わないというところは、「女だけに背負わせない」とにも通じる。ワーク・ライフ・バランスという言葉はだいたひ広まってきたが、「男性ワーク、女性ライフ」という性別のへだたり」の存在が、少子化の一大因ともされている。そして樋口さんはさらに、「ワーク・ライフ・ケア・バランス」のシステム作りを急務としているのだが、男女のへだたりが少しでも少ないシステムを作ることこそ、介護問題のみならず、日本人全体の幸福にかかわってくるのではないかと。

そういえば水上勉は、障子を持った子供のケアを、妻だけに任せていた。彼の介護を非血縁の女性達が担っていたのは彼の夫婦がもしれないが、その場に妻がいなかったのもまた、彼の妻というもののなのであろう。

×月×日  
介護問題は、子育ての問題と似ている。樋口さんの取材によると、フィンランドでは独特の福祉職養成方法があり、「専門高等学校(日本の高校レベル)で最初

に人間のケアの基礎を学び、その後「保育コース」と「介護(主として高齢者)コース」に分かれる」のだそう。それって、とても理にかなっている気がする……。

「アロマザリングの島の子たち」(根ヶ山光一 新曜社 2200円+税)を読み、介護と子育ての共通性について、さらに考えさせられた。タイトルにある「アロマザリング」とは「母親的養育行動(マザリング)を母親以外(アロ)が行うこと」なのだそう。発達行動学の研究者である著者は、かつて日本一出生率が高かった沖縄の多摩郡島でマザリングワークを行い、多良間の出生率の高さは、母親だけで育児を背負い込まないところにあるのでは、と見る。様々な手と目がかかわるため、母子がべったり密着しないのだ。私もかつて、「出生率日

本一の島」が見たくて多良間に行ったことがあるのだが、そこは信号も一カ所だけ(子供達に信号を理解させるため)の、安全に子供が走り回れる場であった。

サトウキビ農家が多いのだが、両親は農作業で忙しいのが、祖父母や保育園、学校のみならず、島全体が子供を見守っている感じ。著者はさらに、この島にはかつて「守姉」という習慣があったことを明らかにする。守姉とは、小学生くらいの子が、非血縁もしくは遠縁の親の依頼によって、赤ん坊の親代わりとなって子育てを手伝う、というもの。今は守姉のシステムはほぼなくなり、代わりを保育園がつとめているそうだが、守姉の精神は、島の人々の中に残る。

島における子育てシステムを他地域にあてはめるのは、困難であろう。が、相手が子供であれお年寄りであれ、家庭内でも外でもなく、様々な人とともに「ケア」という姿勢は、私達にとってヒントになるのではないかと思う。

私の読書日記は、酒井順子、鹿島茂、立花隆、池澤夏樹、山崎芳の五氏が毎週交代で執筆いたします。